

<b>Title</b>	「狐」試論：バンフォード殺しの正当性
<b>Author</b>	高島, 葉子
<b>Citation</b>	人文研究. 46 卷 13 号, p.991-1002.
<b>Issue Date</b>	1994
<b>ISSN</b>	0491-3329
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学文学部
<b>Description</b>	栗山稔教授・奥村三郎教授退任記念号

Placed on: Osaka City University Repository

## 「狐」試論——バンフォード殺しの正当性——

高 島 葉 子

### はじめに

「狐」(“The Fox”)は、ヘンリー(Henry)＝狐の象徴する「生」の、バンフォード(Banford)の表す「死」に対する勝利を描いた作品である、としばしば解釈される。そしてこの場合、ヘンリーは、マーチ(March)をバンフォードとの不毛な「生きながらの死」——リーヴィス(Leavis)の言葉を借りるなら「生きた生命的交流の欠如した」<sup>1)</sup>生活——から救い出す「救済者」であり、彼のバンフォード殺害もこの「救済」という名の下に肯定される。例えば、モイナハン(Moynahan)は、「ヘンリーの行為は殺人ではない。それは靈感に満ちた創造的行為である」<sup>2)</sup>と述べている。また、H.ミル(H. Mill)やウォンケンフェルド(Wolkenfeld)のように、「眠り姫」のモチーフをこの作品に認める解釈もあるが、これも、ヘンリーの行為を肯定的に捉える点で上記の解釈に通じる。王子＝ヘンリーは、魔女＝バンフォードにかけられた魔法の眠りから姫＝マーチを救い出すのであり、バンフォード殺害は「魔女殺し」として肯定される。このような図式的解釈には、確かに心をそそるものがある。「生」と「死」の対立、そして「生」の勝利は、ロレンスの図式的常套なのであるから。

しかし、一方で、このような単純な図式的解釈を疑問視する論もある。例えば、ルーダーマン(Ruderman)は、ヘンリーを勝利者とは見做さない。なぜなら物語はバンフォードの死後も続き、その死後を語る数頁において、マーチの中でバンフォードの精神が生き続けていることが暗示されているからであるという。<sup>3)</sup> また、ダレスキー(Dalesky)は、バンフォード殺害について、モイナハンのように無条件に肯定する論に異を唱えている。マーチを救済す

るのであれば、彼女を連れてヘンリーが逃げればすむのであり、殺人は全く不必要である。それゆえ殺害は、マーチを自由にするためではなく、女性としてのマーチのヘンリーへの服従を確実にするための行為である。このように彼は述べている。<sup>4)</sup>なるほど、これらもまた尤もらしい指摘である。「狐」には、前述のような単純な図式的解釈では説明し切れない曖昧さが確かにある。そこで、本稿では、この作品の衝撃的クライマックスであり、しばしば論議的にもなるバンフォード殺害について、これが「生」の「死」に対する勝利を象徴する肯定的行為として正当化されているのかどうか、という問題を検討してみたい。

### 正当化の戦略

前述のように、ヘンリーのバンフォード殺害は、「生の死に対する勝利」を表す行為として肯定的に捉えられることが多い。実際、明らかに意図的殺人であるにもかかわらず、この行為が読者に与える衝撃は意外に小さい。それは、作品の中に、バンフォードの死を必然として読者に受け取らせる要素があるからであろう。確かに、作者ロレンスは、様々な戦略を用いて、バンフォードの死が必然であるという解釈を読者に求めている。

まず、バンフォードに関する記述には、「死」や「不毛」を連想させる工夫がなされていて、彼女をロレンス文学における否定的人物の典型に仕立てている。彼女の外貌は、どこか実年齢より老けた印象を与える。三十歳にも満たないのに、すでに髪には白いものが混じり、やつれた顔をして眼鏡をかけている。身体も痩せて貧弱である。こうした干からびた老婆のような印象は、ヘンリーによってマーチと比較されるとき、いっそう際立つ。バンフォードは「小さい鉄でできた胸」(“little iron breasts”)<sup>5)</sup>をしているだろうが、マーチは「柔らかい白い胸」[“soft white breasts”] (p.48)をしているに違いない、とヘンリーは思う。

また、「眠り姫」の構図を認める解釈の根拠にもなることであるが、バンフォードの描写には魔女のイメージが使われている。農場を去る前夜、小屋でのキスの後マーチと居間に戻ってきたヘンリーは、暖炉の傍らに屈み込むバンフォードを、「奇妙な、ちっぽけな魔女のようだ」[“like a queer little witch”] (p.55)と思う。その姿はヘンリーの眼に「邪悪」[“evil”] (p.55)とさえ映る。こうしたイメージは、バンフォードが、ヘンリーとマーチの結婚に頑なに反対する、私の強い、悪意に満ちた人物であるという印象を、読

者に強く抱かせるように作用する。

一方、ヘンリーに関しては、終始一貫して「若さ」が強調されている。彼がマーチとバンフォードの前に初めて姿を現したとき、“The young man—or youth, for he would not be more than twenty”(p.14)という記述がなされ、その後も、“the youth”, “the boy”, “the lad” という言葉が使われる。また、マーチによって狐と同一視されることによって、狐の「野性的生命力」がヘンリーに付与される。狐を通して自然の生命力に感応したマーチが、狐の化身として現れたヘンリーに呪縛されていく様子が、鼻、眼、頭などの外見上の類似だけでなく、声や体臭の効果を使って巧みに描かれており、ヘンリーと狐との同一視は無理なく読者に受け入れられる。そしてさらに、この狐との同一視に加えて、“cat” や “wild creature” などの比喩も用いて、ヘンリーの「野性的生命力」が印象付けられる。

狐は言わばハンターであるが、ヘンリーと狐の同一視と関連して、ヘンリーがハンターに譬えられている点も見逃せない。

He was a huntsman in spirit, . . . . And it was as a young hunter, that he wanted to bring down March as his quarry, to make her his wife. (p.24)

モイナハンとは、ヘンリーがマーチを追い求める(hunt)のは、狐が自分の生命を維持するために獲物を追うのと同じで、「生命的本能の力」(“the forces of vital instinct”)<sup>6)</sup>によると述べている。ロレンス自身「アメリカのパン神」(“Pan in America”)の中で、ハンターの、狙った獲物を逃さない能力は、「パン神の力」(“the Pan-power”)<sup>7)</sup>であるとしている。ヘンリーがマーチを追い求める激しい情熱は、パン神的な荒々しい生命力の表れと見做すことは可能である。

ヘンリーの生命力は、狐やハンターのイメージを離れても示唆されている。“He hoped with his blood suddenly firing up that she would agree to marry him quite quickly”(p.47)あるいは、“and his blood burned”(p.48)などの文章において、“blood” という語が彼の荒々しい生命力を感じさせる。マーチに結婚を決心させるのも、ヘンリーのこの「生命力」である。二度目の求婚の時、彼は、マーチの手を掴んで自分の胸に押しつけ、心臓の鼓動を感じさせて自分が真剣にマーチとの結婚を望んでいるのを伝えようと

する。その力強い生命の鼓動はマーチを「麻痺させ」、彼女にバンフォードのことを忘れさせる[“And the signal paralysed her. It beat upon her very soul, and made her helpless. She forgot Jill. She could not think of Jill any more. (p.52)】。

このように、バンフォードは「死」と「不毛」に結びついた否定的人物として、ヘンリーは「生命力」を象徴するロレンスの英雄として描かれている、というのは否定できない。読者にそのように受け取らせることをロレンスは明らかに意図している。従って、ロレンスの論理においては、ヘンリーに軍配が上がるのは必然であろう。しかし、これだけでは、バンフォードの殺害を必然として読者に受け取らせるのには不十分である。はたして、作者は周到に伏線を張っている。

ひとつは、いかにもフロイト的な夢をマーチに見させて、バンフォードの死をマーチが無意識に望んでいるのを示し、それと同時に、第一の夢で狐の尾による火傷感覚でヘンリーのキスを予告したように、この夢も予知夢として使って彼女の死を予告している。夢の中で、マーチは悲嘆に沈みながら、バンフォードの亡骸を台所にある薪入れ用の粗末な木箱に納めてやる。この夢の巧妙な点は、バンフォードと薪の関係を見事に暗示していることである。ヘンリーが切り倒して彼女を打ち殺す木は、立ち枯れ[“it was absolutely dead” (p.60)], 「干からびた」[“sere” (p.60)]木である。この木の象徴しているものが、ロレンス流に言えば「生きながらの死」(living death)という、バンフォード自身の生の在り方であるというのは言うに及ばない。さらに巧妙なのは、この木をマーチ自身が薪にするのに相応しいと考え、切り倒すつもりで以前から根元に少しずつ斧を入れていたという設定である。しかも、その止めをヘンリーが刺すことになる。極めて効果的である。

いまひとつは、「狩り」のイメージである。ヘンリーがハンターであり、彼の手落ちるマーチが獲物であることについては既に言及したが、バンフォードもまた獲物である。マーチは兎に譬えられ、バンフォードは鳥に譬えられる。ヘンリーにマーチとの結婚を告げられた時の彼女の驚愕した様子は、“Banford looked at her [March] like a bird that has been shot: a poor little sick bird” (p.34) と表現される。この比喩は彼女の運命を暗示し、死を予告する。そして、殺害場面では、ヘンリーは鳥を狙うハンターに擬せられ[“as he looked into the sky, like a huntsman who is watching a flying bird” (p.64)], 木に打ち倒されたバンフォードを、撃ち落とした獲物の



死を確認するようにつめる [“he watched with intense bright eyes, as he would watch a wild goose he had shot.”(p.65)]. 予告通りである。

このように、作者は、夢や比喩の連鎖を用いて、バンフォード殺害を必然的な運命の流れの中で起きた事柄であるかのように描いている。夢や比喩の象徴性やそこで成立する論理によって、この行為の非情さや残虐さから読者の注意を逸らし、この行為が物語の内的必然に基づいた正当性のあるものであるかのように書いている。そして、この正当性をさらに裏書きするかのごとく、ヘンリーに関しては、“The inner necessity of his life was fulfilling itself, it was he who was to live”(pp.65-66)と、マーチについては、“She was glad Jill was dead”(p.68)と注釈を加えている。ここには、確かに、ヘンリーの行為を正当化しようとする作者の意図が窺える。

作者のこのような戦略は確かに有効であると言える。だからこそ、ヘンリーが「生」、バンフォードが「死」を象徴し、ヘンリーのバンフォード殺害はマーチを「生きながらの死」から救い出す創造的行為である、という解釈が出てくるのである。しかし、作者の戦略は戦略としてあまりに作為的ではないか。バンフォードを意地悪い魔女に仕立て、ヘンリーを、自然の神秘を備えたような美しい毛並みの狐の化身として登場させ、マーチにあまりにも都合のよいフロイト的夢を見させ、バンフォードを彼女自身としか思えない枯れ木によって死に至らしめ、そして、狐、ハンター(=ヘンリー)、獲物という、これまたあまりに都合のよい比喩とイメージの連鎖で、これらを絡め取る。作為的な不自然さを感じられる。ここで、この作品は必ずしもヘンリーのバンフォード殺害を正当化し得ていないとする見方が一方にある、ということをおぼろげに思い出すのは有意義であろう。これだけの戦略を用いながら、作者はその意図において失敗しているということか。あるいは、これだけの戦略を必要とすること自体が、この作品に説得力が不足しているという証拠なのか。筆者がここで提案したいのは、バンフォード殺害の正当化の、それを失敗と呼ぶなら失敗、あるいは不完全さ、不徹底さ、これ自体もまた作者の意図ではないか、ということである。次節ではこの点を検討してみたい。

### 反正当化の戦略

バンフォード殺害が正当化されているかどうか、という問題が生じるのは、これが間違いなく意図的な殺人だからである。この点で「プロシア士官」(“The Prussian Officer”)の上官殺の場合とは明らかに異なる。もしバ

ンフォード殺害を上官絞殺のように、虐げられた生命・本能の反逆・爆発として描いていたなら、事情は違っていたであろう。「狐」の場合もそのように設定することもできたはずである。読者に事故か殺人か判別し難く書くことも可能だったろう。また、マーチの救済が目的であるなら、ヘンリーがマーチを連れて逃げればすむ、殺人は不必要である、というような非難を作者が予期できなかつたとも思えない。ではなぜ作者はわざわざ非難を受ける危険を犯したのか、という質問をここでする必要はない。作者は意図的にヘンリーに意図的殺人を犯させていると考えるのが自然である。つまり、作者ロレンスはこの行為を、一方で正当性のあるものとして受け取らせる努力をしながら、他方では弁護の余地のない非情な行為として描いてもいる、と筆者は考える。マーチからの婚約解消の手紙を読んだとき、ヘンリーはバンフォードに対してそれまで以上に激しい怒りと憎悪を感じる。「殺害」(kill)という言葉はないが、彼が既にこの時バンフォード殺害を心に決めていることが暗示されている。

Sightless with rage and thwarted madness he got through the morning. Save that in his mind he was lurking and scheming towards an issue, he would have committed some insane act. Deep in himself he felt like roaring and howling and gnashing his teeth and breaking things. But he was too intelligent. He knew society was on top of him, and he must scheme. So with his teeth bitten together and his nose curiously slightly lifted, like some creature that is vicious, and his eyes fixed and staring, he went through the morning's affairs drunk with anger and suppression. In his mind was one thorn—Banford. He took no heed of all March's outpouring: none. One thorn rankled stuck in his mind: Banford. . . . And he would have to get it out. He would have to get the thorn of Banford out of his life, if he died for it.

With this one fixed idea in his mind, he went to ask for twenty-four hours leave of absence. He knew it was not due to him. His consciousness was supernaturally keen. (pp.58-59)

確かに、「狂気」(“madness”)という語が示すように、あまりに激しい怒りのために、ヘンリーは精神のバランスを失っているようである。しかし、ヘンリーは怒りの衝動のために殺人という行為に走ったのだ、ということを示すためにこの文章が書かれているとは思えない。殺してしまうほどバンフォードに対する怒りが激しかったということはあるとしても、ここには、激しい怒りと同時に、首尾よく企てを執行しようとする慎重さと用心さが既に書き込まれている。“in his mind he was lurking and scheming towards an issue”, そして“*But he was too intelligent. He knew society was on top of him, and he must scheme[,]*”とあるように、彼は正気を失っているわけでも、盲目になっているわけでもない。彼の中で、怒りの対象であるバンフォード=邪魔物=「刺」を取り除こう、しかも社会的に咎められない利口な方法で、という決意が固まってゆくのが分かる。そして、大尉に外出許可を願いに行く時には、はっきりとバンフォードを抹殺するという「ひとつの固定観念」(“this one fixed idea”)を抱いている。さらに、この時の緊張した精神状態が、“consciousness”という語を使って“*His consciousness was supernaturally keen*”と表現されているのも注目に値する。これ以後の彼の一連の行為が、彼の意志による意識的な、正気の行為であると告げているからである。

次に殺害実行場面を見てみよう。マーチから斧を手渡されたヘンリーは、バンフォードの頭に旨く木の枝が当たるように冷静に角度を計算したうえ、彼女の強情な性格を利用して、彼女が土手の上から動かないように巧みな言葉で誘導する。少し長くなるが、この場面を引用する。

He was perfectly still. He looked away, up at the weak, leaning tree. And as he looked into the sky, like a huntsman who is watching a flying bird, he thought to himself: “If the tree falls in just such a way, and spins just so much as it falls, then the branch there will strike her exactly as she stands on top of that bank.”

He looked at her again. She was wiping the hair from her brow again, with that perpetual gesture. In his heart he had decided her death. A terrible still force seemed in him, and a power that was just his. If he turned even a hair's breadth in the wrong direction,



he would lose the power.

“Mind yourself, Miss Banford,” he said. And his heart held perfectly still, in the terrible pure will that she should not move.

“Who me, mind myself?” she cried, her father’s jeering tone in her voice. “Why, do you think you might hit me with the axe?”

“No, it’s just possible the tree might, though,” he answered soberly. But the tone of his voice seemed to her to imply that he was only being falsely solicitous and trying to make her move because it was his will to move her.

“Absolutely impossible,” she said.

He heard her. But he held himself icy still, lest he should lose his power. (pp.64-65)

すべての文が、今、この場で起ころうとしていることがヘンリーの意志によるものであり、それ以外の何ものでもないとはっきり伝えている。伝えようとする作者の意図がはっきりと分かる。どこにヘンリーの行為を弁護し、正当化する文章があるだろう。なるほど、“like a huntsman who is watching a flying bird”という、前述の狩りのイメージが認められる。しかし、「ハンターが鳥を殺すように、ヘンリーはバンフォードを殺す」という比喩は、ここではヘンリーの行為の必然性を示す以前に、ヘンリーの行為の、意図的であるがゆえの非情さを際立たせている。ここに描かれているのは、完全犯罪を達成すべく全神経を鋭く尖らせている非情な男の姿に他ならない。この後に描かれている、彼が、木の枝がバンフォードの後頭部に命中するのを一瞬も眼を逸らすことなく見守り、撥ね飛ばされて倒れた彼女をじっと注視して死を確認する場面についても、同じことが言える。

No one saw her crouch a little and receive the blow on the back of the neck. No one saw her flung outwards and laid, a little twitching heap, at the foot of the fence. No one except the boy. And he watched with intense bright eyes, as he would watch a wild goose he had shot. Was it winged, or dead? Dead! (p.65)

ここでもハンターの比喩は、ヘンリーの冷酷さと非情さを鮮やかに視覚化す

る。

バンフォード殺害の場面は、狩りの比喻を待つまでもなく、狐射殺の場面を想起させる。犬に追われ、もはや逃げ延びる道を失ったと見える狐を、ヘンリーは待ち伏せ、見事に仕留める。狐の行動を正確に読み、暗闇の中で素早く狐の姿を認め、焦らず冷静に、至近距離まで引き付けて引き金を引く。そして、じっと注視して、命中したことを確かめる。この有能なハンター振りが、バンフォード殺害では、巧妙に事故に見せかけて人を殺す殺人者の冷酷さになる。このふたつの“killing”に共通するのは異様なまでの冷静さである。「プロシア士官」において上官を絞殺する従卒に見られる興奮や錯乱は微塵もない。家禽を盗みに来た狐の射殺と人間の殺害が、ヘンリーにとっては同等であるかのように、狐を射殺する時に見せた冷静さと非情さは、バンフォードを殺す時にも何ら変わるところがない。ハンターの比喻によって、それがいっそう鮮明になるのは言うまでもない。正にヘンリーは、ハンターが狐を殺すようにバンフォードを殺したのである。そして、何より重要なのは、そのように作者が描いていることである。ヘンリーの殺害行為を意図的な、それゆえ非情な行為として読者に印象付けようとしているとしか思えない。

「狩り」のイメージは、二つの相殺的役割を担っていると言わねばならない。「ハンターと獲物」の比喻によってバンフォード殺害に運命的必然性を付与する。しかし、他方で、この殺害が紛れもなく意図的な殺人であることを告げ、その非情さを顕にする。この二重性は作者の態度の二重性に重なる。先に述べたように、この作品には確かに、ヘンリーを「生」、バンフォードを「死」と結びつけて描き、ヘンリーのバンフォード殺害を必然的なものとして正当化しようとする作者の意図が認められる。しかし、今見たように、作者は明らかに、ヘンリーの殺害行為を意図的で非情な行為として描いている。これはもう、殺害行為の正当化に失敗している、と言えるようなものではない。自ら意識的に正当化のための戦略の効果を半減させている、と言うべきである。

そしてさらに、もうひとつ興味深いことがある。バンフォード殺害の原動力になるヘンリーのバンフォードに対する怒りは、真に迫った激しい描写で書かれているので、正当性を与えられているように見えるが、作者はこれを必ずしも正当化しているわけではない。例えば、先に引用した、マーチからの婚約解消の手紙を読んだヘンリーが、バンフォードに対する激しい憤怒に

燃える場面に、次の文章がある。“In his mind was one thorn—Banford. He took no heed of all March’s outpouring: none.” ここには、すべてをバンフォードの悪意に帰し、マーチの真摯な心情の吐露には全く意を介さないヘンリーの短絡思考に対して発せられた、作者の否定的な声が聞き取れる。“none”という文末の語には特にその響きがある。また、これ以前の段階でも、ヘンリーの怒りに対する否定的な言及が散見する。マーチとの結婚を宣言したものの、バンフォードの強い反対に遭い、ヘンリーは気分をひどく害する。この場面にも興味深い記述がある。怒りも露な表情で座っているヘンリーの様子を描写した、“He sat stiff in his chair, staring with hot blue eyes from his scarlet face. An ugly look had come on his brow”(p.35)という文章がまず挙げられる。ここでは“ugly”という語が否定的ニュアンスを醸し出している。そしてこの少し後に次の一節がある。

Henry sat stiff and sulky in his chair, with his face and his eyes on fire. March came and went, clearing the table. But Henry sat on, stiff with temper. He took no notice of her. . . . She glanced at him each time as she came to take things from the table, glanced from her large, curious eyes, more in curiosity than anything. Such a long, red-faced sulky boy! That was all he was. He seemed as remote from her as if his red face were a red chimney-pot on a cottage across the fields, and she looked at him just as objectively, as remotely. (pp.35-36)

まず、マーチからの手紙を読んだ時と同じように、ここでもまた、ヘンリーは肝心のマーチには無関心である(“He took no notice of her”)。この場面に限らず、彼女の親友であるバンフォードと自分が反目し合えばマーチが傷つくのではないか、という当然あってよい懸念が彼には一切ない。己の欲望を満たすことしか念頭にない、自己中心的な偏狭さ、未熟さが示されると言える。また、“sulky”という子供っぽさを暗示する形容詞がくり返して使われ、しかもマーチの視点から、“Such a long, red-faced sulky boy! That was all he was”という手厳しい表現がなされている。彼の怒りが、所詮、自分の思い通りにならないために不貞腐れている子供の正当化しようのない我儘に等しい、という非難が仄めかされているとも考えられる。マー

チの眼にそのように映っているということで、それはいっそう痛烈である。

## 結び

このように、作者は、ヘンリーの殺人が意図的な、それだけに非情な行為であるというに留まらず、この行為の正当性そのものが自明の理ではないことをも示唆している。しかし、繰り返し述べるように、一方では、ヘンリーがマーチの救済者であり、彼のバンフォード殺害は必然である、と読者に受け取らせるために様々な工夫を凝らしてもいる。われわれ読者は、ある解釈の可能性を示唆していると思われるサインを一旦見出すと、作品全体をその方向で整合的に解釈しようとする。たとえ矛盾する記述が存在しても、それに気付かぬ振りをするか、作者の不注意として片付けてしまう。だからこそ、ロレンスはバンフォード殺害の正当化に失敗しているという評者も出てくる。しかしテキストの矛盾を作者の失敗としてしまうことはここでは止めたい。失敗というにはあまりに作為的な矛盾である。確かに、テキストには、バンフォード殺害を「生の死に対する勝利」とする解釈を可能にする要素が存在している。明らかに作者は読者をこの読み方へと誘っている。しかしこの解釈を疑問視させるような操作も一方で同時に行っている。この矛盾は作者の意図したものである。これこそが作者ロレンスの意図であり、戦略である、というべきであろう。いかにもロレンス的な図式的解釈へと読者を誘っておきながら、安易な整合的解釈を拒絶する矛盾を孕んでいるのが、この「狐」という作品なのである。この矛盾をテキストの欠陥、作者の失敗として片付けるのは容易い。しかし、これを作者自身の意図したものとして受け止め、これに立ち向う姿勢が評者には必要である。従って、単純な枠組による図式的解釈ではなく、さらに包括的な視野で捉えた解釈が求められる。このような解釈の試みは、筆者の今後の課題となろう。

## 註

1. F. R. Leavis, *D. H. Lawrence: Novelist* (London: Chatto and Windus, 1955), p.310.
2. Julian Moynahan, *The Deed of Life: The Novels and Tales of D. H. Lawrence* (Princeton: Princeton Univ. Press, 1963), p. 199.
3. Judith Ruderman, *D. H. Lawrence and the Devouring Mother: The Search for a Patriarchal Ideal of Leadership* (Durham, N. C.:



Duke Univ. Press, 1984), pp. 56-57 参照。なおルーダーマンは「狐」は「生」と「死」との対立という図式では説明し切れないとし、精神分析の立場から「呑み込む母」(The devouring mother) という概念を使って解釈している。

4. H. M. Dalesky, "Aphrodite of the Foam and *The Ladybird Tales*," in *D. H. Lawrence: A Critical Study of the Major Novels and Other Writings*, ed. A. H. Gomme (Sussex: The Harvester Press, 1978), pp. 142-58 参照。
5. D. H. Lawrence, "The Fox" in *The Fox, The Captain's Doll, The Ladybird*, ed. Dieter Mehl (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1992), p. 48. 以下すべてこのテキストからの引用はこの版に拠り、頁数を括弧内に示す。
6. Moynahan, p.207.
7. D. H. Lawrence, "Pan in America" in *Phoenix: The Posthumous Papers of D. H. Lawrence*, ed. Edward D. McDonald (London: William Heinemann, 1936), p.28.